

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：13301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884029

研究課題名(和文) インドにおける手描き模様染色布にみられる「宗教的」意義の比較研究

研究課題名(英文) Comparative Study of "Religious" meaning in Hand-Painted Dyed Cloth made in South India

研究代表者

松村 恵里 (MATSUMURA, Eri)

金沢大学・国際文化資源学研究所・特任助教

研究者番号：10711921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が対象とする寺院掛布製作現場では、布が実質的な儀礼的機能を喪失している一方で、製作物の実用化と技術・デザインの合理化が進行している。増加する製作者たちの技術レベルが下方方向に広がるなか、代替的な価値観の一つとして「宗教性」が見直されるようになり、実用布製作においても地域的な特色として外部に向けて発信されるようになった。

では、儀礼性を有しない布が孕む宗教性とはどういうものか。それは、製作者にとっては「俗」であるよりも「聖」に近い者であることを表すと同時に、経済性が優位にたちつつある中で、俗性を払拭し聖性を取り戻す事ができる「浄化作用」を発揮する機能を果たし始めた付加価値であるといえる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this article is to confirm the meaning and the value of "Religiosity" given to the cloth, and to examine the relation to sustainable handicraft revitalization by comparing it to other types of temple cloth made in North India. This paper will not only analyze this from the aspect of the design, but also through the incorporation of the approach reflected by the makers' conscious process.

As of the present, the cloth made in North India is always granted "Religiosity" without the maker's consciousness that input religious. On the other hand, the kalamkari cloth has lost its ritual function. Therefore, the "Religiosity" came to be reviewed as one of the alternative sense of values, and it came to be push out as a regional characteristic aiming at outside of. It can be said that the "Religiosity" come to be an additional value to wipe out earthliness for "Depuration" to regain the "Sage" of the temple cloth and the makers.

研究分野：インドを主な対象とする、文化人類学

キーワード：宗教性 伝統性 儀礼 製作者 モノ

## 1. 研究開始当初の背景

インドでは1950年代に手工芸復興の動きが活発になり、州ごとに選ばれた手工芸が繊維省とその下部組織によって維持されることとなった。それにより、「インドらしさ」を象徴する手工芸は、インド国内外の人々に素朴で野趣あふれる「伝統的なモノ」として認知されるようになった。本研究における調査対象である南インドのアーンドラ・プラデーシュ州のシュリ・カーラハスティで製作される「カラムカリ (*kalamkari*)」と呼ばれる手描き模様染色布もそのような手工芸復興の影響を受けたことにより、技術と製作者が維持されることとなった手工芸のひとつである。

インドでは日常生活と信仰が密接な関係にあるだけでなく、「伝統的」手工芸と信仰との間にもつながりを見いだすことができる。特にカラムカリのような手描き模様染色布における自由描写によるデザインには宗教的意味が強く付加されてきたものも少なくない。しかし、近代化のなかで紙媒体の神画が量販され普及し、人々の生活様式も変化するにしたがい、本来の宗教的な用途よりも、収入のための経済活動の一環としてのモノの製作が増加しているのが現状といえる。

シュリ・カーラハスティのカラムカリもすでに実質的な儀礼的機能を喪失し、主に観賞用として製作されているが、2004年に政府の経済的テコ入れの影響を受け、さらに手工芸支援を目的としたNGOが始動したことで実用化が急速に促進されはじめ、衣服用の布地や小品として作られるようになった。実用布の製作を増やしたことで製作者たちの多くは経済状況が改善したが、調査の過程で興味を惹かれた点は、特に技術の高い製作者たちの間で「宗教性」が再認識され始め、「シュリ・カーラハスティらしい手描きカラムカリ」として、押し出され始めたことであった。これは経済的テコ入れ以前と比べ、製作者たちの間で「宗教性」が新たな意味・価値を持ち始めていると捉えることができる。

それでは、その意味・価値とはどのように捉えうるのか。

これまでの手工芸開発はデザイン開発の傾向が強く、それはすなわち、「伝統的」な技術やデザインを新しい用途に如何に応用するかという点に眼目を置いてきたものといえる。ただしこのような手法は、一方で、高い技術の解体と簡易化を促すことにもつながる。応用する側にも高い知識・技術がなければ、結果的に没個性化した「同じようなモノ」が再生産され続け、かえって手工芸製作現場を衰退させるといった危険性もはらんでいる。そのような状況を生み出す要因のひとつとして、「つくる」側の意向が汲み取られることなく開発が進むという現状が考えられる。

製作者たちはモノをつくるにあたり、対価という経済的な利点だけを追求しているわ

けではない。モノをつくるなかでモノに影響され、製作者としての自身を形成してゆく。高い技術を身に付けた者たちは、単に経済活動に終始するような他者とは異なるという自負を持っている。そこで、彼らが強調しようとする「宗教性」に関する意識を、人類学的手法を用いて調査することで、経済性とは異なる観点からモノづくりを再考できないか、というのが本研究の出発点であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、手描き模様染色布製作に込められた「宗教性」、および製作過程に関わる社会的、経済的状況を、インド国内の他地域で製作される布と比較・検討するために、下記の2点を目的とする。

(1) 本研究の対象地であるアーンドラ・プラデーシュ州は、「伝統的」手描きカラムカリの産地であり、インド国内に数種存在する「カラムカリ」の中でも、その技術の高さや宗教的デザインの多様性において特に認知度が高い。その儀礼的機能がすでに失われている点の一つの負の特徴ともなっているが、それにも関わらず、デザインに込められた意味や製作者たちの宗教観を知る上で、最適な調査地といえることができる。一方、グジャラート州で製作される寺院掛布「マターノチャンドルヴォ (*mātā no chandarvo*)」は、ごく一部の工房を除き、合成染料やシルクスクリーンを使用した技法に移行しているが、儀礼的機能を有していることが特徴となっている。

本研究では、人類学的手法を用い、これらの布に付与される宗教性を単にデザインの面から分析するのではなくこれまでほとんど顧みられてこなかった製作者たちの意識に迫りながら比較考察することで、伝統的手工芸に付与されてきた「宗教性」の実態および現代的意義を明らかにし、インドの日常的・慣習的信仰からは把握できなかった「宗教性」を解明することを目的とする。

(2) 経済的変化以前の序列化のなかでは、就業形態が異なっても、各製作者・工房に大きな経済的差がなかったが、実用化が進んだことで、技術力に加えてマネージメント能力も必要となり、各工房の収入に開きが出始めた。しかし、製作者たちは自らを経済的な差異を基準として評価しようとしめない傾向にある。本研究では、これまでほとんど顧みられてこなかった、コーストという序列化を含有するインド社会のなかで生きる製作者側の意識と経済的側面との関係に注目することで、有形の「伝統的」なモノが含有する無形の文化的意味が、市場に向けての製作品づくりに如何なる影響を及ぼすかについて明らかにする。加えて、「伝統的」宗教性に注目することで、デザイン開発の視点のみからは検討が困難であった持続的、且つ応用可能な手工芸開発や地域活性のあり方につい

での検討を目的とする。

### 3. 研究の方法

資料に基づいて先行研究の整理を行った上で、アーンドラ・プラデーシュ州とグジャラート州にて下記の地域を中心として、人類的調査を行った。調査にあたっては、すでに既知の製作者らがあり、現地に関する知識や人脈を生かした調査が可能となった。

アーンドラ・プラデーシュ州

2013年12月21日 - 2014年1月7日

2014年8月10日 - 2014年9月7日

(1) シュリ・カーラハスティを中心に、製作者たちの日常の宗教実践の確認を行うため、特に製作者たちが信条的に受け付けられない事象と欠かせないと思える事象を明確にしなが、該当する要素を抽出し、製作者たちに投げかけることで、実際どのように反応するかについて記録した。また、製作者たちの「宗教観」と対外的にアピールする際に用いる「宗教性」との関係性について、参与観察、および聞き取りの手法を用いて調査した。

(2) シュリ・カーラハスティにおけるデータ収集にあたっては、製作者の認識を知るために「調べる」側から「教えられる」側になり、製作者に直接指導を受けての叙事詩や神話についてのデザイン習得、およびデザインの意味や重要性についての実践的調査を行った。さらに、製作者たちの宗教観が、果たして製作にどのように反映されているのかを確かめるために、製作者たちの製作品のデザイン傾向を掴んだ上で、彼らに同じデザイン課題に取り組んでもらい、製作されたモノを彼ら自身が如何に捉えているのかについての確認を行った。

グジャラート州アフマダーバード

2014年9月28日 - 2014年10月5日

アフマダーバードでは、マターノチャングルヴォというマター神を祭る儀礼に関するデザインが主流の手描き模様染色布が製作されている。現在、製作者たちの居住区は2カ所(ミルザプール、ワスナ)に分かれており、マター神を信仰するワガリカーストによって製作され、かつては共同体外の人々に対する排他性が強かったといわれていたが、現在ではその点も変わりつつある。データ収集にあたっては、下記のような聞き取り調査と参与観察を中心とした。

(1) 製作者に直接指導を受けての神話のデザインの意味や重要性についての聞き取り調査を行った。同時に、製作者たちの日常の宗教実践と土着的な神への信仰のあり方等についての聞き取り調査と参与観察を行った。

(2) 染色布が儀礼用にどのように使用されていて、どこまで排他性が強いのかについて

確認し、製作者たち自身が布の持つ宗教性を如何に認識しているのかについての聞き取り調査を行った。

### 4. 研究成果

本研究の成果として、以下の2点があげられる。

(1) シュリ・カーラハスティの製作現場では、宗教的なモチーフを扱うためにも、宗教的知識と教養を身に付けた身体であることを望ましいとする風潮があり、基本的に「ビジネスマン」は「金儲けに走る者」という蔑視の意味があった。例えば当該地では、「神さまを描く宗教的な布だから、自分のサインを入れる必要はない」などの考えが聞かれ、神様を描く同じ画面上に、自分のサインを書くことは、暗黙の了解の中でほとんど成されてこなかった。

しかし、製作現場における経済的状況の変化以降、衣服を中心とした実用布製作のための製作者が急増し、その技術レベルや製作における意識は下方向に広がりを見せた。製作者たちの技術、就業形態等の差異化によって多様化しているにも関わらず、彼らは実用布をつくり続ける限り、市場においては「伝統的な手工芸をつくる人々」として同等に捉えられ、特に技術レベルの高い製作者たちは、収入を得るといった経済的な問題とつくり手としての自負の間でジレンマを抱えることとなった。

シュリ・カーラハスティのカラムカリにおいてはその史実の一部が曖昧なうえに、インドの従来社会における職能集団によって布がつくられているわけではない。さらには、布が本来孕むべき儀礼的役割を喪失しており、製作者たちが「伝統性」として主張できるのは「技術・デザイン」に関わる部分のみといえる。他者との差別化を図り、製作者自らの抱えるジレンマを解消するためのひとつの要素としての「伝統性」が、実は強みであると同時に弱みでもあるという矛盾をカラムカリは内包することになっているのである。

このような状況のなかで、自明であった「宗教性」の明確化が、一部の製作者たちに一つの価値として捉えられるようになったと考えられる。

儀礼性を保有する北インドで製作されるマターノチャングルヴォは、布が宗教性を孕んでいるので、製作者たち自身も儀礼性とは分かちがたい関係を保っている。すなわち、彼らとその「宗教性」をことさら強調せずとも、布が地域的な特色としての「宗教性」を外部的に向けて発信することができる。一方、儀礼性を有しない南インドで製作されるカラムカリにおいては、布は実質的な儀礼性を有しない。そのためヒトが宗教性を帯び、日常の儀礼を欠かさない者、見事に儀礼をとり

おこなえる者、「俗」であるよりも「聖」に近い者であることが製作者としての付加価値となってきた。そのような状況のなかで、用途の実用化が進み、製作現場内部の技術的差異・経済的差異が広がったことにより、高い技術力や知識を持った者たちが、均質化するモノや未熟な者たちとの差別化を図るために再確認し始めた製作者としての鍵概念が「宗教性」であるといえる。すなわち、製作者たちはそれを、経済的に優位な状態であるとしても俗性を払拭し聖性を取り戻すことができる「俗性に対する浄化作用」を發揮する機能としてとらえ始め、自身に内在する「宗教性」として積極的に主張するようになったといえる。

以上から、本研究では、これまではほとんど記録されてこなかったモノづくりの作り手たちの「語り」を通して、彼らの意識の問題を明らかにしながら、地域的なモノづくりにおける「宗教性」の重要な潜在的価値について検討することが可能になったと考えられる。

(2) 版染め技法を用いるマーターノチャングルヴォの技術は高くないと捉えられがちであったが、実際は、シルクスクリーンプリント、版染めから、手描き染色を用いた高品質の物を提供する者まで存在し、製作者たちも幅広く多様化している。しかし、布そのものが儀礼的機能を保有しているため、急激な実用化は起こっておらず、経済的な序列にも大きな変化は見られなかった。

一方、経済的状况が変化して以降、シュリ・カーラハスティでは衣服を中心として、カラムカリ技術を用いた実用布製作が増加し、技術やデザインの合理化・簡易化が進んだ。実用布の供給量が急増したことや、市場におけるデザインの盗用問題が頻発したことにより、特に技術レベルの高い人々の間で、寺院掛布タイプへの回帰が起こり、実用布においても新しい宗教的デザインを工夫する動きが活発化した。そのような状況のなかで、積極的に独自の付加価値を的確に捉え、確実な信頼のもとに販路を獲得している工房もあれば、政府の経済的支援の勢いを借りたまま現状維持にとどまったために、工房閉鎖に追い込まれた工房も出始めている。

製作者間の経済的な差異はさらに開きつつあるが、興味深いのは、技術力の高い製作者たちがより経済面を改善しようとする方向性と自身の自負を満足させる方向性の妥協点として、実用布製作のために、より宗教的でシュリ・カーラハスティらしいデザインを選択していることである。実用布に施される宗教的なデザインは以前からもあったが、2013年以降の調査では、一部でより宗教的な知識が必要とされる緻密なデザインが発達、定着している状況がおきている。このようなモノをつくることは効率が悪く、経済的

な利益が高いとは決していえないが、製作者たちの一部で宗教的デザインが選択され始めているということになる。その理由として、全ての作り手たちが単に「売れば良い」と考えているわけではなく、むしろ体面的には経済性を押し隠し、宗教性を押し出そうとする傾向にあることが考えられる。彼らは製作現場における位置づけや自身の自負とのせめぎあいのなかで、「自身は何をつくることができる作り手」であるかを模索し、自分なりの答えを出そうとした結果、自明であった「宗教性」を見直し、デザイン開発に利用し始めたといえる。

その結果、それらは「売る側」「買う側」にも受け入れられ、新しいデザインとして成功し、経済的効果も生んでいる。政府主導のデザイン開発では、誰でも作れるレベルに技術を下げること、女性たちや農村の人々が職を得られ、短期的な経済効果もあったが、「どこでも買えるモノ」が量産されてしまったため、製作者たちに経済的な混乱も招いた。それは、開発する側がつくる側の人々を同質化して捉えたことによる要因が大きいと考えられる。一部の技術レベルの高い製作者たち自身が、自らのつくるべきモノを模索し、受け入れられていったように、製作現場にどのような多様な人々が存在し、「誰が何をすることができるのか」「誰が何をづくりたいのか」を知ることは、特徴あるモノづくりをサポートするデザイン開発において基本であり、欠かせない要素である。その作業なしに、モノづくりにおける同質化を避けることは困難といえる。

本調査では、調査者自身が製作者たちと共に社会的実践を経験することで、言語化しにくい認識の問題を言語化し、また、インドにおける宗教観についての、新しい視点を探ることに取り組んだ。つくる側をサポートし、より特徴ある質の良いモノづくりを目指すためにも、製作現場の人々がどのような状況におかれ、どのように考えているのかを把握することが、今後必要になってくるといえ、本研究はそのような持続可能な手工芸開発やモノづくりを目指すための一助として寄与できると考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

松村恵里

「南インドで製作される寺院掛布に見られる「宗教性」の意義」

中央区連携講座中央区民カレッジ「文化資源の保全と活用～世界の文化財」第5回

築地社会教育館(東京都中央区)

2014年11月22日

松村恵里

「南インドで製作される寺院掛布に見られる「伝統性」とは-実践体験に基づいたフィールドワークから」

北陸文化人類学会  
富山大学(富山県富山市)  
2014年11月15日

松村恵里

「製作者の多様化と「つくる者」としての自己表象の選択-南インドで製作される「伝統的」寺院掛布製作の事例から」

日本文化人類学会第48回研究大会  
幕張メッセ国際会議場(千葉県千葉市)  
2014年5月17日

〔図書〕(計1件)

松村恵里

『つくり手としての座標 - 南インドにおける寺院掛布製作現場から(仮)』

約300ページ

木犀社

2016年出版予定(確定)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松村 恵里 (MATSUMURA, Eri)

金沢大学・国際文化資源学研究センター・特任助教

研究者番号: 10711921

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: